

子どものスポーツ活動の推進に向けた現状と課題

- 北海道美深町の取組み事例から -

前田 研吾      勝田 隆

キーワード：地域スポーツ振興 連携 総合型地域スポーツクラブ

The current status and issues to promote sports activities of children

-The case of activities in Bifuka, Hokkaido-

Kengo Maeda      Takashi Katsuta

Abstract

This is a case study of the local sports promotion of Bifuka, Hokkaido in Japan. The purpose is to promote children's physical activity. It will examine the current status and issues of children's sports activity.

The following became clear through research and the conducting of hearings. I carried out to the plural people of sports professional of Bifuka. In addition, we conducted a survey targeting sports activities in Bifuka 6<sup>th</sup> grade.

As a result of survey, the implementation of new business is being promoted by ever more tightly to organizational and human cooperation. In addition, efforts are also characteristic of actively building cooperation with external cooperation. Efforts aimed at the virtuous circle, continue to promote sports activities for children.

Keywords: local sports promotion, cooperation, comprehensive community sport club

## 1 緒言

### 1-1 我が国の子どものスポーツ活動を巡る問題や課題

昨今、子どもの体力・運動能力の低下が深刻な問題となっており、多方面においてその原因究明や改善に向けた施策が実践されている。しかしながら、現状では子どもの体力・運動能力は一部上向き傾向にあるとはいえ、二極化に歯止めをかけるには至っていない。北村(2006)は、子どもの体力低下の原因として「学力を過度に重視する価値観によって、スポーツや外遊びが軽視されてきたことや、子どもを取り巻く生活環境の変化によって、スポーツや外遊びの機会が減少していることなどが挙げられている。屋外で体を動かしたりスポーツを楽しんだりすることは、子どもたちの運動能力の発達や体力の増進に重要な役割を果たしている。」と指摘している。

中央教育審議会答申(2002)では、子どもの体力・運動能力の低下に対する直接的な原因として、室内遊びの増加による外遊びやスポーツ活動時間の減少が指摘されている。また、脇田(2004)によれば「空き地や生活道路などの手軽な遊び場の減少や子どもの生活習慣の乱れが近年進んでいる」と指摘されていることから、子どもが屋外で安全かつ気軽に遊べる環境の整備や、遊ぶ機会を創出・増加させる取組みが、我が国における重要な課題であると考えられる。

一方、子どもを対象に実施されている新体力テストでは、ここ数年は上向き傾向がみられ始めたことと報道されている。しかし、報道では、共通して未だ昭和60年前後のピーク時と比較した場合、低水準にあると言われている。小林(2005)は、子どもの体力・運動能力には「学校で受けた教育内容が関係していると考えられる。すなわち、体力づくりが盛んであった1970年代から1980年代に教育を受けた世代が高水準になっているというのが実情である。」と述べており、青少年期において体力・運動能力を高めることの重要性が伺えるであろう。また、現在の子どもについて「こうした時代的な視点からみると、今の子どもたちの体力低下は、体力のピーク値そのものが低いことから、成人後の年齢に伴う体力の低下によって、比較的早い時期に生活に必要な体力(生活体力)を維持できなくなり、医療との付き合いが長い深刻な高齢化社会を現出させる可能性が極めて高い。」と問題視している。

また、文部科学省による「子どもの体力向上のための総合的な方策について」(2004)では、子どもの体力向上に向けた総合的な方策が示されている。

このような、国家規模においても子どもの体力・運動能力の低下をはじめとする子どものスポーツ活動には、社会的な重要性をはらんでおり、改善・充実に向けては、多面的かつ総合的な方策および実践が望まれている。視点を変え、地域のスポーツ振興や子どもの実情を考えた場合においても、同様の危惧すべき課題が内在しているのではないだろうか。

### 1-2 研究目的

前節では、我が国における子どものスポーツ活動、体力・運動能力に関わる問題を焦点化し概観した。

本研究では、前章における子どものスポーツ活動、体力・運動能力の現状に関わる諸問題を根底に据え、北海道美深町における子どものスポーツ活動の推進、体力・運動能力の向上等を目的としたスポーツ振興の事例に着目する。特に、近年推進されている総合型地域スポーツクラブの実践事業の経緯、実態を整理しながら、事業の対象である子どもの実情を調査し、事業の発展的拡充を前提とする今後の課題を明らかにする。また、市町村における子どもを対象とするスポーツ振興の視点から、本研究から得られた課題が我が国における地域のスポーツ振興へのロールモデルの1つとなるべく、今後の地域のスポーツ振興に求められる視点を地域のスポーツ振興担当者として考察を行う。

## 2 研究枠組および方法

### 2-1 研究枠組

本研究は、美深町における子どもを対象としたスポーツ振興に携わる関連機関の担当者からの視座において、今日における地域の子どもの関わるスポーツ実施環境の現状、抱えている解決すべき課題および現在課題に対し改善・解決を目的として実施されているスポーツ振興方策を明らかにするものである。

また、美深町で取り組まれているスポーツ振興方策の発展的拡充へ向けた実態把握および課題発見を目的とし、スポーツの実施主体者である子どもに着目した調査を行うものとする。特に、これまで継続的に美深町内のスポーツ振興方策に関わりを持ち続けているであろう美深町内小学校6年生全児童を焦点化し、現在のスポーツ・運動習慣と運動・スポーツ等の身体活動を包含している生活習慣に対する実態調査を行うものとする。調査結果を基に、いま抱えている課題の改善・解決へ向け、実施されているスポーツ振興方策の検証を行うものとする。注釈)本研究においては、我が国における地域のスポーツ振興の先駆的取組みが行われているという特徴を有する、北海道美深町のスポーツ振興の取組事例に着目し、研究の対象としたことを付言する。

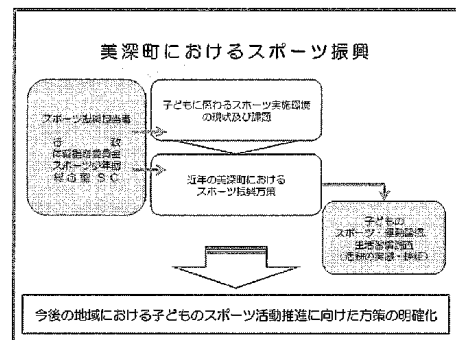


図1 本研究に関する研究枠組

### 2-2 調査対象

本研究では、美深町における子どもを対象とした体育・スポーツ振興に関する資料の収集および収集した情報の検討を行った。また、資料の収集、検討を基に、以下の美深町内における子どものスポーツ実施、指導に関わる担当者、町内小学校6年生全児童の保護者への調査を行った。

- 1) 美深町における子どもを対象とした体育・スポーツ振興に関する公文書および発行資料
- 2) びふかスポーツクラブ事務局員1名
- 3) 美深町教育委員会教育グループ体育振興担当職員1名
- 4) 美深町体育指導委員会 美深町体育指導委員1名
- 5) 美深町スポーツ少年団指導関係者1名
- 6) 美深町立美深小学校および美深町立仁宇布小学校に在籍する6年生全児童の保護者51名

### 2-3 調査方法および調査期間

- 1) 美深町における子どもを対象としたスポーツ振興に関する現状と課題に関する調査
  - ▶調査方法 前項1)の収集
  - ▶調査期間 平成22年4月～12月中旬にかけて適宜実施
- 2) 美深町における子どもを対象とするスポーツ実施環境の現状と課題に関する調査
  - ▶調査方法 前項2)、3)、4)、5)を対象とした聴き取り調査
  - ▶調査期間 平成22年5月23日、平成22年6月8日、平成22年9月10日、平成22年10月8日、平成22年10月31日
- 3) 子どものスポーツ・運動習慣、生活習慣等に関する調査
  - ▶調査方法 前項6)を対象とした質問紙調査
  - ▶調査時期 平成22年10月29日～11月2日

### 3 美深町における子どもを対象とするスポーツ振興および

スポーツ実施の現状と課題

3-1 美深町におけるスポーツ振興の現状

本節では、美深町におけるスポーツ振興の現状を関係者への聞き取り調査および資料収集により整理する。北海道北部に位置する美深町は、人口約5,100人(平成22年4月末現在)の全国的にみると比較的小規模の地方自治体である。住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査(平成22年3月31日)によると、総人口5,101人のうち65歳以上の高齢者人口は1,772人(34.7%)、20歳未満の若年者人口は748人(14.7%)という分布になっており、10人のうち3.5人が高齢者、若年者の減少傾向から少子高齢化が進行している自治体の一つと言える。

美深町には、幼保連携型の体制をとる認定こども園1校、小学校2校、中学校2校が所在し、475名(認定こども園101名、小学校233名、中学校141名)が在籍している(平成22年4月末現在)。また、美深町内には、行政支援の下、町民のスポーツ振興を担う体育協会(13団体が登録)、子どもの各種スポーツ活動の実施機会となるスポーツ少年団(9団体が登録)が所在する。スポーツ少年団の活動では、これまでに全道規模で開催される大会への出場をはじめ、全国規模、国際規模の大会への出場・上位成績を収めた団体が複数あり、今日まで活発的な取り組みがなされてきた。

美深町教育委員会の体育・スポーツ行政担当者(男性・30代)は、近年取り組み始めたスポーツ振興施策について、次のように回答している。

「美深町では、従前より子どもから高齢者に至るあらゆる世代の町民が、スポーツ活動に積極的に取り組んできた背景があり、現在でも生活のなかにおける“スポーツ”を比較的重要視しており、関心度の高い町民が多いと認識している。平成17年度には、全国の自治体に先駆け、国立スポーツ科学センターや財団法人日本オリンピック委員会等の関係組織との連携によるスポーツタレント発掘・育成事業に着手した。平成18年度には、美深町はもとより、子どもの体力・運動能力の低下が社会的課題として挙げられる昨今の状況を鑑み、町内の小中学校における全児童・生徒を対象とした新体力テストの実施に着手し、以降毎年実施している。新体力テスト実施により得られた結果は、平成18年度に美深町と相互協力協定を締結した北海道教育大学の協力・支援を受け、分析を行い、今後のスポーツ活動を促すためのアドバイスを付記した測定結果票を児童・生徒一人一人に配布している。しかしながら、新体力テストの分析に着手したことにより、子どもの体力・運動能力の低下・低水準傾向にあるという課題が、美深町においても深刻な課題として浮き彫りとなり、関係各所で美深町全体のスポーツ振興として改善策の検討がなされた。同時期に、既存の単一スポーツ団体とは形態が異なる総合型地域スポーツクラブの設立構想が行政や体育協会等の中で起こり、子どもの体力・運動能力に関する課題の改善・解決への受け皿となる組織、施策の検討が進められ、平成20年10月に総合型地域スポーツクラブ“びふかスポーツクラブ(以下、びふかSC)”を設立した。びふかSCの設立により、子どもたちの体力・運動能力の低下に歯止めをかけ、向上させていくという所懐を具現化することへ向かう有効なシステムづくりに繋がったと考えている。」

びふかSCの設立により「子どもの体力・運動能力の把握→検証・分析→フィードバック→体力・運動能力の改善・向上への機会提供」という体力・運動能力の改善・向上というPDCAサイクルが整備されたと言えるであろう。

3-2 美深町のスポーツ振興における課題

前節で示した調査から、美深町のスポーツ振興に関わる行政、団体等の組織や実施に際する環境は、近年の多岐にわたるスポーツ振興を推進してきたことにより、比較的整備、充実化が図られてきていることが伺える。また、実施事業の改善、更なる発展に向けた事業評価については、これまで美深町の行

政執行指針である「美深町総合計画」、社会教育行政全体の執行方針を示した「美深町社会教育推進中期計画」において町のスポーツ振興に関する課題がまとめられ、行政執行の基幹となっている。

平成13年度から10年間において効力を持つ美深町の行政執行指針として策定された「第4次美深町総合計画」、それに基づき美深町教育委員会にて策定された「第6次美深町社会教育推進中期計画」において、美深町のスポーツ振興の課題を次のようにまとめている。

しかしながら、スポーツに特化したスポーツ振興計画は策定されておらず、スポーツ振興審議会などの機関も設けられていないのが現状であることから、町のスポーツ全域に関する課題や住民のニーズ、実施事業の成果などは集約しきれていないことが伺え、それらを具現化した新たなスポーツ振興の検討、実施に関する課題を抱えている状況にある。

また、美深町における現状のスポーツ振興に関する課題について、美深町体育指導委員会の体育指導委員の一人(女性・40代)は次のように回答している。

「美深町のスポーツ振興では、所在する課題の発見・解決に向けて、近年発展的拡充が図られてきている。しかし、現在はスポーツ振興の業務は、年々複雑かつ高度化してきており、スポーツ振興担当者の許容量や能力を超越しているように感じる。現状では、事業の企画・運営・実施において困窮している部分があり、実状を勘案する機会の必要性を感じており、実情に適した人材の登用が現状における重要課題の1つであると認識している。また、子どもたちのスポーツ活動現場においても、指導者の高齢化や固定化が進んでおり、今後はより深刻化してくる課題であると捉えている。」

先述した「子どもを中核に位置付け推進してきたスポーツ振興」は、専門的知見や指導が求められる業務内容を包含しており、牽引者としての専門的人材の登用が課題であろう。

また、人材の枯渇が起ころぬよう、美深町に潜在する人材の有益な活用に向け、早期での人材養成を多面的に行うことが求められている。現在、スポーツ振興に関わる人々は、スポーツ振興に関わることにより、創出可能となる素養を具現化していくことを担うべく、人材養成を急務の課題として捉えるべきなのではないだろうか。

表1 びふかスポーツクラブの設立趣旨

びふかスポーツクラブの設立趣旨	
設立準備委員会	平成18年5月26日 発足 びふかスポーツクラブ Kids オープニング セレモニー(平成18年10月1日)
クラブ	平成20年10月1日 設立 【設立目的】 生涯スポーツ社会の実現に向け、幼児から高齢者までが運動に親しむことができるスポーツ環境の整備充実に努めるとともに、スポーツの振興を通じた子どもの体力の向上や大人の健康増進、さらにはタレント発掘・育成などの取組を通して、地域のスポーツの発展に寄与することを目的とする。
<p><b>びふかスポーツクラブの目指すもの</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 小さい頃から色々な運動を体験して運動嫌い・運動嫌いにストップ</li> <li>2. 体力づくり・身体能力が向上する色々なトレーニングの提供</li> <li>3. タレント発掘・育成の取組みの推進</li> </ol> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>子どもから高齢者まで健康で暮らせるまち「びふか」</p>	

#### 4 美深町における子どものスポーツ活動の促進に向けたスポーツ施策

##### 4-1 総合型地域スポーツクラブ設立の背景と経緯

先述のとおり、我が国において、小学校、中学校、高等学校、大学等で毎年実施されている「体力・運動能力調査（※スポーツテスト、1999 年より新体力テスト）」において、青少年の体力や運動能力は、1980 年代中頃から低下傾向にある。文部科学省にて 2003 年度より開始された「子どもの体力向上推進事業」は、こうした子どもの体力低下と、肥満や生活習慣病の増加等、社会的問題である子どもの体力や健康状況の低下に対する施策である。この施策では、日常生活において、子どもが気軽に運動・スポーツを楽しめる環境を、地域、学校、家庭等の連携により創出することを目指し、「体力向上キャンペーン」「スポーツ・健康手帳の作成・配布」「子どもの体力向上実践事業」が展開されている。文部科学省では、この取組みを通じて 2010 年度までに、子どもの体力・運動能力を向上させるとともに、運動習慣のない子どもを減少させることを目標としている。

また、国内のみならず諸外国においても、子どもを含め生涯スポーツの充実化や社会的課題に対するスポーツ振興等の政策が策定されており、美深町へも平成 18 年にオーストラリアにおける先進的事例の情報が国立スポーツ科学センターから提供された。

オーストラリアでは、青少年を対象とした「Aussie Sport（オージー・スポーツ）」というスポーツ振興プログラムが展開されている。オージー・スポーツとは、オーストラリア人の愛称である「Aussie」を用いた青少年のために展開されているプログラムである。1986 年に開始され、3～20 歳までの幼児から青少年までを対象としており、以降約 200 万人を超える青少年が参加している。このプログラムの特徴は、子どもの発育発達に合わせた段階的な身体活動やスポーツを提供しているところにある。また、各段階に応じて、スポーツのルールや用具等、スポーツに子どもを合わせるのではなく、子どもにスポーツを適応させるという発想に基づいた工夫がなされている。オーストラリアでは、こうしたプログラムの提供により、子どもたちが運動・スポーツでの成功感を体感し、身体を動かすことを楽しむ子どもの増加を促進している。また、オージー・スポーツのプログラムは、オーストラリア国内の多くの学校において正課カリキュラムまたは教科外活動として採用され、実践されている。2004 年からは、国家施策として子どもの定期的な身体活動への参加を推奨する「Active School Curriculum (ASC)」が国内の全小・中学校へ導入された。

ASC のプログラムである「Active After School Community (AASC)」は、地域スポーツクラブや競技団体が協力し、小学校の放課後にも実施され、小学生の運動・スポーツ機会の拡充が図られている。オーストラリアでは、行政、スポーツ関連団体、学校等の連携により、子どもたちの運動・スポーツ活動の機会が拡充されていると考えられる。

美深町においても、日本やオーストラリアをはじめとする国家規模で抱えている同様の課題が内在している。

びふか SC 設立の経緯について、設立準備期より関わりのあるびふか SC 事務局担当者の一人(男性・50 代)は、次のように回答している。

「びふか SC 設立以前の最も大きな問題は、運動・スポーツ習慣のある子どもと習慣のない子どもの二極化であった。生活習慣の変容が大きな理由ではないかと推察する一方で、子どもがスポーツ活動に取り組める環境は、単一種目のスポーツを高頻度で行える 9 つのスポーツ少年団が中核を担っていた。子どもの将来を考えた上で体力・運動能力を改善・向上させるには、複数種目の運動・スポーツに触れる機会が求められているのだと感じ、年代に準じた“遊び”から始めることができる機会づくりの必要性を強く感じた。しかしながら、地理的側面もありスポーツ医・科学情報が希薄である環境のなかで、プログラムを展開するプロセスに大きな課題を抱えていた。また、子

どもたちの運動・スポーツ活動の指導的立場で関わる人材にも限りがあり、プログラムの指導体制を確立する必要があった。」

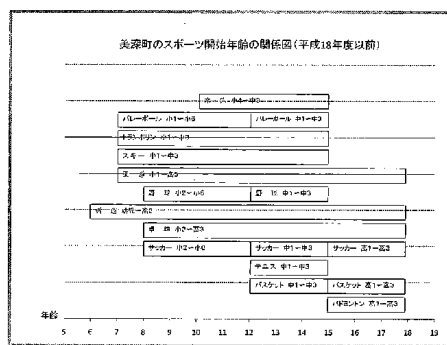


図2 美深町のスポーツ開始年齢の関係図(平成 18 年度以前)  
※本問から作成「種目開始年齢ガンチャート」を基に作成

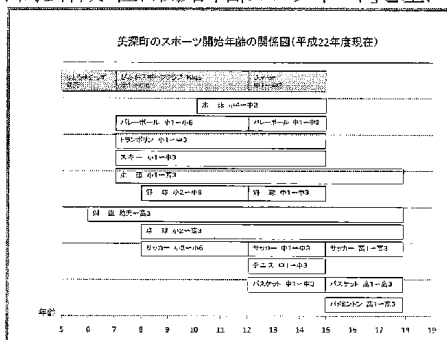


図3 美深町のスポーツ開始年齢の関係図(平成 22 年度現在)  
※本問から作成「種目開始年齢ガンチャート」を基に作成

##### 4-2 スポーツ活動の促進を目的とした機会の概要

前節では、調査により明らかとなった、美深町における子どもの運動・スポーツに関わる諸課題への改善・解決方策としてびふか SC を立ち上げた背景と経緯を示した。

本節では、美深町にて設立されたびふか SC における運営、企画、指導を担当する 2 名(びふか SC アドバンス部会部会員 1 名、美深町体育指導委員 1 名)へ実施した聞き取り調査から、びふか SC が展開する子どもの体力・運動能力の改善・向上及び子どもたちの自主的なスポーツ実施を目的とした機会における、実施プログラムの特性及び実施体制について整理する。

##### 4-2-1 スポーツ活動の促進を目的としたプログラム特性

平成 17 年度より着手したスポーツタレント発掘・育成事業により、相互連携関係にある国立スポーツ科学センターから先進国の事例に関する情報提供を受け、また、現在の競技者育成に関する世界基準となっているカナダの Dr. Istvan Balyi が提唱する長期競技者育成理論についての情報提供を受けた。

美深町では、当初コーディネーショントレーニングを取り入れた運動プログラムに関する指導者養成講習会等を開催し、そのプログラムを町内の子どもたちに提供する取り組みを始めた。しかし、美深町が抱える問題は、子どもたちのコーディネーション能力を高めることではなく、運動・スポーツの習慣化に向けた子どもたちの発育・発達に合わせたプログラムが、いかに組織的かつ計画的に、継続性を持って実施できるかということであった。そこで、美深町のスポーツ振興関係者らは、先述したスポーツ先進諸外国のプログラム事例等を参考に、美深町独自のプログラムを新たに開発する事業に着手した。また、そのプログラムを系統的に実施できる環境の整備を同時に進め、新しい理念の下で開発したプログラムを通して、町内の子どもたちにより質の高いスポーツ活動の機会を提供し、子どもたちの運動能力向上と体力低下に歯止めをかけるべく取り組み始めた。この運動能力向上を目的としたプログラムを「Sportunity(スポチュニティ)」と名付け、びふか SC 設立に先立

ち平成18年度より実践を開始した。

このプログラムは、学校での体育の授業やスポーツ少年団の日頃のトレーニングプログラムとしても活用され始めており、子どもたちが積極的にスポーツに関われる重要な機会となっている。

また、学校で実施される新体力テストの結果などにに基づき、子どもたちの体力・運動能力の現状に即したプログラムを提供し、運動能力向上や体力の改善を図っている。

現在では、近隣自治体に対して Sportunity のプログラム提供を行い、北海道上川管内北部8市町村の体育協会研修会などを通じてプログラムの普及活動を進めている。びふか SC において、Sportunity を中核とする会員向けに提供しているプログラムに関する基本的な情報を図4に示した。

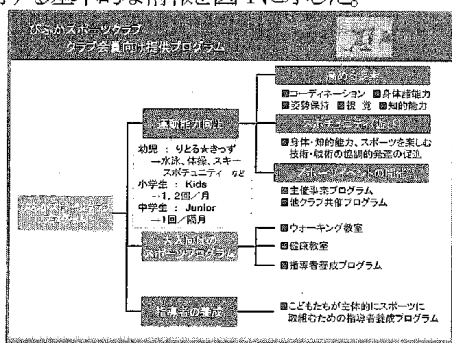


図4 びふかスポーツクラブ クラブ会員向け提供プログラム  
※本間ら作成「びふかスポーツクラブのクラブ会員向け提供プログラム」を基に作成

#### 4-2-2 Sportunity の実施体制

Sportunity は、平成18年度より小学生を対象とする「びふかスポーツクラブ Kids」を月1回程度の頻度で開催し、平成22年度は年間14回の開催が計画されている。平成21年度からは、中学生を対象とした「びふかスポーツクラブ Junior」に着手し、隔月1回程度開催し、平成22年度は年間6回の開催が計画されている。平成22年度には、就学前の幼児を対象とした「びふかスポーツクラブりどる★きっず」に着手し、より「あそび」を中核とした事業の展開が検討されている。

Sportunity のプログラム開発・運営は、びふか SC アドバンス部会を中心に、事務局及び美深町体育協会、美深町体育指導委員会等からの協力・支援体制のなかで展開されている。プログラム指導に対しては、美深町体育指導委員会、各スポーツ少年団、美深町体育指導委員会等の町内スポーツ関連団体からの指導者の協力・支援体制のなかで実施されている(図4)。また、美深町内の6つの学校(認定こども園:1、小学校:1、中学校:1、小中学校:1、高等学校:1、高等養護学校:1)の協力を得て、指導者として教職員の派遣を受けている。

Sportunity は、美深町の中心に位置する美深町民体育館を主要拠点として実施されている。また、冬季には豪雪地帯の自然環境を有効活用した雪上プログラムが実施されており、実施環境の側面においての多様なプログラム実施に向け検討が進められている。

Sportunity の実践および実施体制について、びふか SC 専門部会部会員としてプログラムの開発、指導に携わるスポーツ少年団指導関係者の一人(女性・40代)は、次のように回答している。

「昨今の美深町内における子どもの身体活動やスポーツの係わりには、既存にある機会に参加するということがその大半を占めていた。将来の社会を築いていくであろう子どもたちが、心身ともに健全な状態を保持していくことを含め、多くの子どもたちがスポーツを楽しみ、積極的に身体を動かすことを楽しめる環境づくりがこれからの我々の使命であると考えていた。Sportunity のプログラムを開発する上で我々が掲げている理念は「楽しさ」である。この「楽しさ」が生まれる環境をつくるために、まず子どもの発育発達に応じたプログラムを開発する必要

があった。同時刻、同空間に小学1年生から6年生が集う中で、集う全ての子どもが楽しいと感じられる機会とするためには、その子どもたちに合わせたプログラムの開発、提供が必須であると考えた。ルールや用器具、活動時間などあらゆる側面から、子どもの楽しさを考えた。その試みの一つとして、平成22年度から小学生を対象とした Kids において、参加することによってスタンプが押せる出席カードを新たに作成した。参加する子どもにとっての励みや、参加する楽しさの増幅につなげることを目的としている。また、このプログラムの開発、実践においては、びふか SC が主動となり、体育協会加盟団体、スポーツ少年団、体育指導委員会、学校、行政等との連携、協力体制を強固することを同時に進めた。これまで経験のないことに取組む上では、このような知の結集は必要不可欠であった。この組織づくりを行ったことにより、びふか SC 単独での事業ではなく、相互にとって有益な機会づくりとなり、各々の組織での活動への良い波及が生まれたように感じる。」

このように、びふか SC における Sportunity は、行政、スポーツ関連団体、学校等の連携により、子どものスポーツ活動機会の充実化を図り、体力・運動能力の向上へ向け実践されており、前節にて述べたオーストラリアの国策として実践されている AASC プログラムと類似する体制下において推進されていることが明らかとなった。

表2 平成22年度びふかスポーツクラブ提供プログラム(計画)  
平成22年度 びふかスポーツクラブ提供プログラム(計画)  
＜対象 幼児、小学生、中学生＞

りどる★きっず ＜幼児＞	運動あそび 24回 ※幼児センターへの指導者デリバリー方式による実施 水泳教室 4回 びふかのあそび広場(体育の日イベント) 1回 種目:びふか近代八種競技(標的系種目), 青空トランポリン, 新体力テスト 体操ランド 6回 種目:マット運動, 跳び箱, 鉄棒, トランポリン, バランスボール, コーディネーション 計6種目 Kids スキー教室 2回
Kids ＜小学生＞	Sportunity 14回 水泳教室 4回 びふかのあそび広場 1回 体操ランド 6回 アスリートへの道! 水泳トレーニング教室 1回 アスリートへの道! 陸上トレーニング教室 1回 ※「アスリートへの道!」:オリンピックとの交流事業 ダンスアカデミー 1回
Junior ＜中学生＞	Sportunity 6回 びふかのあそび広場 1回 アスリートへの道! 水泳トレーニング教室 1回 アスリートへの道! 陸上トレーニング教室 1回 ダンスアカデミー 1回
指導体制	各スポーツ少年団指導者、体育指導委員 幼児センター、小・中・高・高等養護学校教員等 ※Sportunity 実施時:15~20名/回

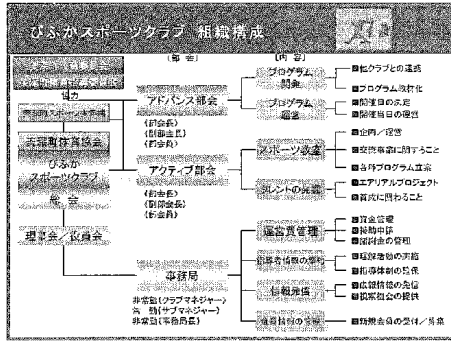


図5 びふかスポーツクラブ組織構成  
※本間ら作成「びふかスポーツクラブ組織体制」を基に作成

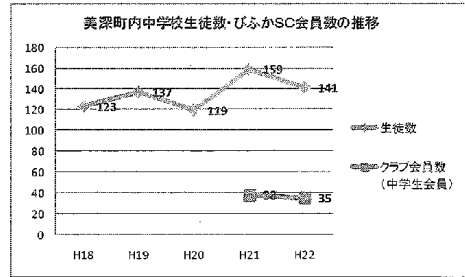


図9 美深町内中学校生徒数とびふかSC会員数の推移

5 美深町における子どものスポーツ活動の推進を目的としたスポーツ施策の現状と課題

5-1 びふかスポーツクラブにおける子どもの活動状況

平成20年10月1日に設立され、2年が経過する現在では、びふかSCが主催する事業へ幼児から高齢者まで多くの町民の参加がみられ、会員数の推移からもびふかSCの利用促進傾向にあることが示されている。

びふかSCの設立に先立ち平成18年度からプレ事業として「びふかスポーツクラブ Kids」が実施されていた。その経緯を捉え、平成18年度から現在までの美深町内における園児数・児童数・生徒数の推移及びびふかSCにおける該当会員数の推移を図7,8,9に示すことにする。

幼児・小学生・中学生の3つの区分での各会員数は、各学校における総人数に対する割合を見た場合、全区分で増加しており区分によって差異はあるものの、子どもたちのスポーツ参加促進につながっていることが伺える。しかしながら、中学校全生徒に対する会員数の割合は、他の区分と比較した場合、低水準にあることがわかる。更なるスポーツ参加促進につなげるには、改めてニーズ調査等の実施を検討することや、現状でのスポーツ参加状況を把握する実態調査の必要性が示唆される。

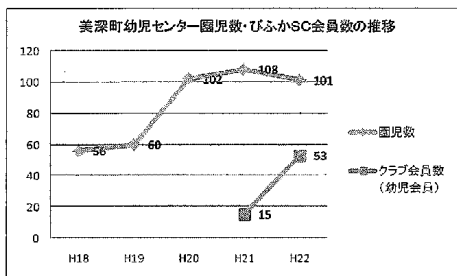


図7 美深町幼児センター園児数とびふかSC会員数の推移  
(※平成19年度以前の数値は、美深幼稚園の園児数)

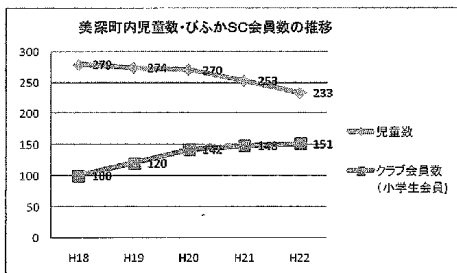


図8 美深町内小学生児童数とびふかSC会員数の推移

5-2 子どものスポーツ実施状況及び生活習慣について

先述してきた、多岐にわたる運動・スポーツ機会において経年的に身体活動を行ってきたであろう美深町内の小学校6年生51名の現在の運動・スポーツ習慣及び生活習慣等に関する実態調査を、その保護者51名を対象に行った。本調査では、国内における地域スポーツ振興の先駆として捉えられる取り組みを推進している美深町でのスポーツ振興方策が、子どもの体力・運動能力の向上への前提となるであろう運動・スポーツ等の身体活動の実態及び身体活動を包含する生活習慣に対し、どのような影響を波及してきたのか、現状調査を行うものとする。

第2章の第3節3)の調査方法・期間において、対象51名中48名から回答(回収率約94%)が得られた。

本研究では、回答した48名を4群[<びふかSC及びスポーツ少年団加入群>、<スポーツ少年団加入群(※びふかSCには未加入)>、<びふかSC加入群(※スポーツ少年団には未加入)>、<びふかSC及びスポーツ少年団未加入群>]に分類し、分析を行った。4群の人数内訳は、びふかSC及びスポーツ少年団加入群:24名(50%)、スポーツ少年団加入群:11名(約23%)、びふかSC加入群:4名(約8%)、びふかSC及びスポーツ少年団未加入群:9名(約19%)である。

調査内容から運動・スポーツ、食事、学習、TV・ゲーム等の生活習慣に要する時間(単位:分)を上記4群及び母集団を含めた5群に分類したものを、図10~15で示すことにする。

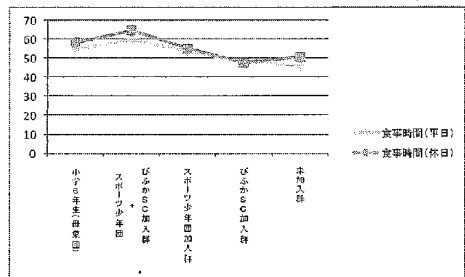


図10 1日(3食)の平均食事時間

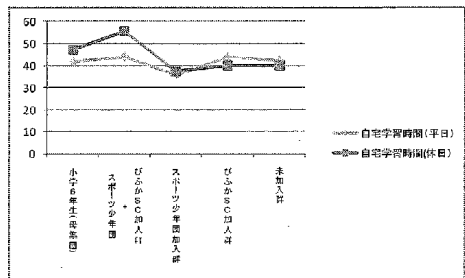


図11 1日の平均自宅学習時間

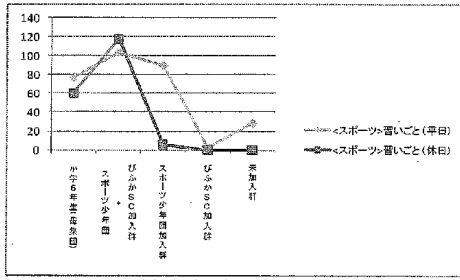


図12 1日の習いごと(スポーツ)平均活動時間

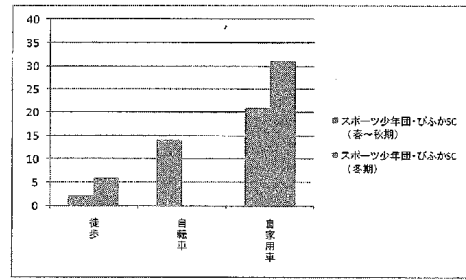


図17 スポーツ少年団・びふかSC 時交通手段(母集団)

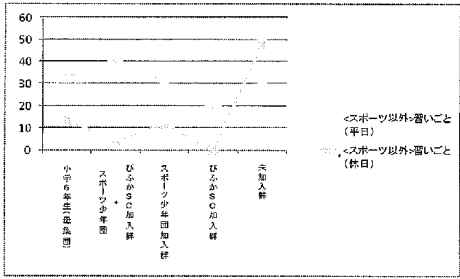


図13 1日の習いごと(スポーツ以外)平均活動時間

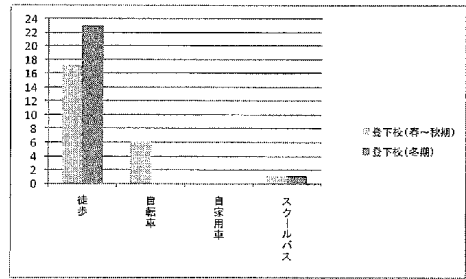


図18 登下校時交通手段(スポーツ少年団+びふかSC群)

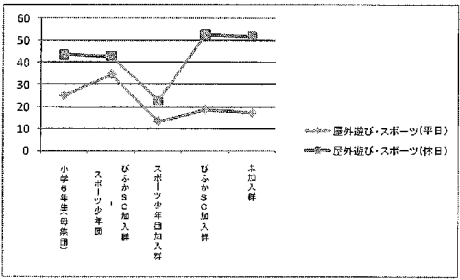


図14 1日の屋外遊び・スポーツ平均活動時間(習いごとを除く)

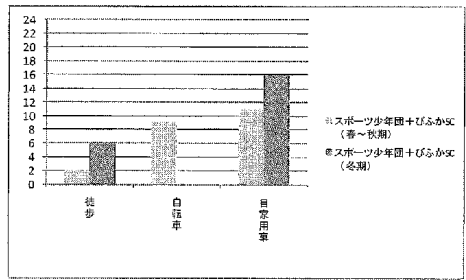


図19 スポーツ少年団・びふかSC 時交通手段(スポーツ少年団+びふかSC群)

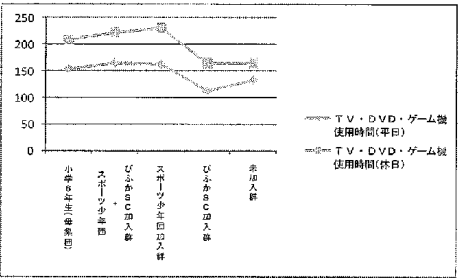


図15 1日のTV・DVD・ゲーム機平均使用時間

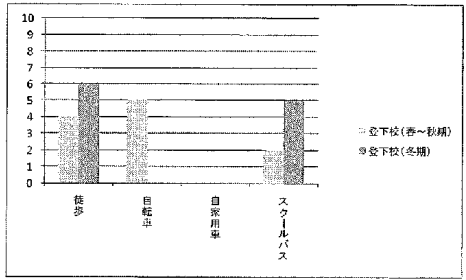


図20 登下校時交通手段(スポーツ少年団群)

また、調査により、子どもたちの通学、スポーツ少年団・びふかスポーツクラブへの交通手段が明らかとなった。各群の人数に差異はみられるものの、特徴的な結果が示された(図16～24)。

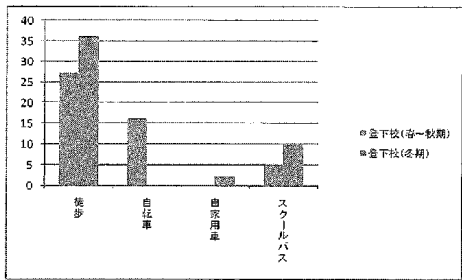


図16 登下校時交通手段(母集団)

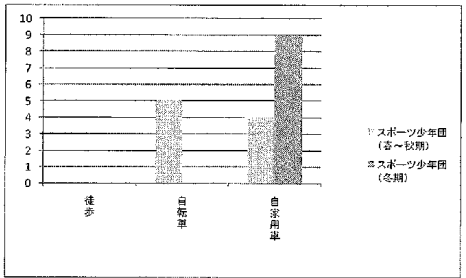


図21 スポーツ少年団時交通手段(スポーツ少年団群)

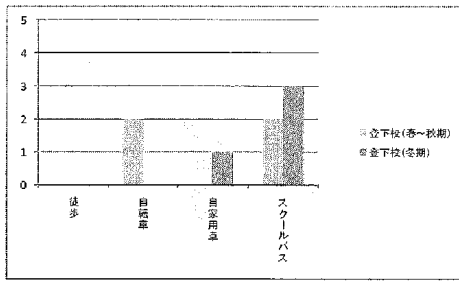


図 22 登下校時交通手段(びふかSC群)

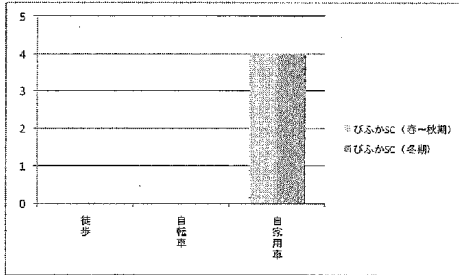


図 23 びふかSC時交通手段(びふかSC群)

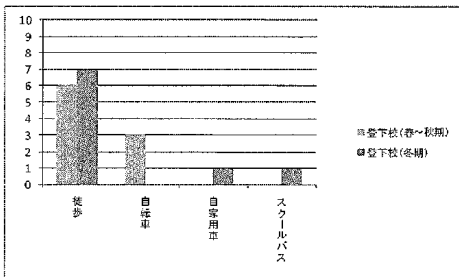


図 24 登下校時交通手段(スポーツ少年団・びふかSC未加入群)

### 5-2-1 運動・スポーツ習慣及び生活習慣

今回は、運動・スポーツ活動状況により分類して運動・スポーツ習慣及び生活習慣について現状を整理したが、各群とも大きな特徴はみられなかった。しかしながら、分析の過程において個人単位での運動・スポーツ習慣及び生活習慣には項目別で大きな差がみられた。今後は、分析の観点、方法を変え、再度検証してみる必要があるであろう。

### 5-2-2 通学手段

びふかSC及びスポーツ少年団加入群では、春～秋期間の通学手段のうち約96%を<徒歩><自転車>が占めており、冬期間においても約96%が<徒歩>であった。また、びふかSC及びスポーツ少年団未加入群においても類似する値を示した。

スポーツ少年団加入群では、春～秋期間の通学手段のうち約82%を<徒歩><自転車>が占め、冬期間においては約45%が<スクールバス>を通学に利用している。

びふかSC加入群(4名)では、春～秋期間は<自転車>もしくは<スクールバス>を利用しており、<徒歩>で通学する子どもはいないことが明らかとなった。冬期間においては、3名が<スクールバス>を利用している。また、びふかSC及びスポーツ少年団加入群やスポーツ少年団加入群ではみられなかった<自家用車>を利用している子どもが1名いることが分かり、<徒歩>での通学児童がないという特徴を有する「車利用群」であることを示している。

注釈)美深町におけるスクールバスの運行は、行政により行われている。スクールバスの利用に際する運賃は、原則利用者が全額負担することとされている。美深町では「美深町遠距離通学児童生徒の通学補助条例」に準

じて、児童生徒の通学距離に応じた補助が行われている。

### 5-2-3 びふかSC・スポーツ少年団活動時交通手段

びふかSC及びスポーツ少年団加入群(※22名:24名のうち未記入者2名を除く)では、春～秋期間の交通手段において他群にはみられなかった<徒歩>で移動する子どもが約9%いることが分かった。冬期間においても、<自家用車>利用が約73%を占める中、他群にはみられなかった<徒歩>で移動する子どもが約27%いることが分かり、<徒歩>で移動するという特徴を有する「徒歩移動群」であることを示している。

スポーツ少年団加入群(9名:11名のうち未記入者2名を除く)では、春～秋期間の交通手段の約56%を<自転車>を利用児童が占めている。冬期間においては、春～秋期間の<自転車>利用児童全員が<自家用車>利用となり、通年で<徒歩>移動はないことが分かった。

びふかSC加入群(4名)では、通学手段での春～秋期間においてみられた<自転車>を利用する児童がおらず、全員が通年で<自家用車>を利用することが分かり、通学手段同様に「車利用群」であることを示しており、更に交通手段には送迎に際し支援者が必ずいることが明らかとなった。

## 6 まとめにかえて

### 6-1 市町村における子どものスポーツ活動の推進を目的と

したスポーツ施策の発展的拡充に向けた提言

子どものスポーツ活動の促進に対して、実施者である子どもが取組む運動・スポーツは、個人の自発的活動によって行われるべき性質を有する活動である。では、子どもの自発的活動に対して、支援者として関わるスポーツ振興担当者、団体が担うべき役割とは、そのような議論は広く我が国においてスポーツ振興に関わる者たちの間で頻繁に行われているのであろうか。特に、子どもたちに関わるスポーツ振興担当者であれば、現在の子どもの関する実態やスポーツの実態は、対象に「より即した効果的なスポーツ振興施策」を創造するための有効な判断材料となるであろう。恒常的に「なぜ」と問い、内在する諸課題の包含した現状を一步步つよい方向へ向かわせるという役割自体が重要であることをスポーツ振興に関わる担当者は認識することを望む。

平成22年8月に文部科学省により策定されたスポーツ立国戦略には、今後の我が国のスポーツ政策の基本的方向性が示されている。子どものスポーツ活動の充実化を図る主な施策として①総合型地域スポーツクラブを中心とした地域スポーツ環境の整備 ②ライフステージに応じたスポーツ活動の推進 ③学校における体育・運動部活動の充実の3点が示されている。具体的な施策としては、身近なスポーツ活動の場の確保、幼年期・学童期の運動・スポーツ指針の策定、子どもの体力向上に向けたスポーツ機会の充実等の取組の推進、中学生・高校生のスポーツ機会の充実等が示されている。

国家規模でのスポーツ政策の中にも示されているように、地域スポーツにおける環境の整備、住民のスポーツ機会の創造等を図ることは、我が国におけるスポーツにおいて非常に重要な取組むべき施策として捉えられる。

本研究にて取り上げた、美深町における総合型地域スポーツクラブをはじめとしたスポーツ振興の取組事例のなかには、我が国の他の地方自治体においても潜在的に抱える課題として捉えられるであろう課題が見受けられた。

また、調査を進める中で、なぜ人口約5,100人の町が我が国のスポーツ振興の先駆的取組を推進することが可能となっているのかという疑問への一つの解答が見受けられた。美深町では、全町民を対象とした町内会・自治会対抗となる町民大運動会が毎年開催されており平成22年度大会で55回を開催を重ねる。そして、冬期間の体力づくりを目的とした全町ミニバレーボール大会は、男子が29回、女子が31回これまで毎年開催されている。このような全町民が一堂に会する事業は、近



年では多くの市町村で廃止される傾向にある。美深町においても、地域の実情から開催に対する非難の声が少なからず上がっているなか、地域の力(ひと)が集り貴重な機会を継続させていくという担当者の強い意志が感じられた。こうした、まちづくりに必要な不可欠である事業を継続し続ける推進力が、先進事例が希少な新たな取組みへの決断力の礎を築いていることが示唆される。

美深町におけるスポーツ振興の現状		【特出すべき特徴】
スポーツ少年団 (単一注目実施団体)	サッカー・野球・トランポリン水泳・卓球 バレーボール・柔道・剣道・スキー 9種目	①オーバーフレイム戦略 →生涯スポーツと 競技スポーツの融合 →プログラムの開発 →指導者の確保 →地域間の連携
総合型地域スポーツクラブ	びふかスポーツクラブ →タレント発掘・育成のプログラムを 内包した総合型地域スポーツクラブ →専門的人材の雇用 上川北部広域スポーツクラブ(5市町村連携) →行政界の枠を超えたスポーツ振興	②ネットワーク戦略 →中央機関 JISS・JOC・SAJ →大学 北海道教育大学 海部大学 →専門的人材の雇用 →地域間交流 (旭川県・和歌山県から のスキー合宿誘致)
タレント発掘・育成事業	美深町タレント発掘・育成事業 →種目転向型 →エリア別(BIFUKA AIR FORCE) →専門的人材の雇用(オリンピック出場者) 上川北部広域タレント発掘・育成事業 →各組織特化型 →5市町村連携・協同 行政界の枠を超えたスポーツ振興	↓ スポーツの好循環

図 27 美深町のスポーツ振興とその特徴

「地域の中にあるスポーツ」の一片を捉えることができたことは、今後の我が国のスポーツ振興方策、地域におけるスポーツ振興方策を創造する上での、検討課題に資するものであったと考える。本研究では、北海道美深町のスポーツ振興を焦点化し、実施されているスポーツ振興方策の整理、子どものスポーツ活動に対する実施率や加入率等の基礎的情報を基に、現状と課題を明らかにした。

しかしながら、図 27 で示したとおり、美深町では取組み振興施策を従来の枠組から抜本的な枠組に置換え、潜在的課題の解決や地域スポーツの発展に向けた、広義でのスポーツ振興に取り組んでいることが明らかとなった。今後は、多くのスポーツ振興方策の主体者である子どもへのヒアリング調査を行い、スポーツ活動への動機を究明することが必要であると捉えている。そして、美深町でのこれまでのスポーツ振興の整理、検証を進め、我が国の新たなスポーツ振興のロールモデルとなるべく、スポーツ振興方策をトータルデザイン化されることが求められていると考える。

結論に代えて、今後の地域におけるスポーツ振興の発展的拡充に向けた提言を示す。

**提言 1. 既存の枠組から抽出したスポーツ振興の創造**

本研究によって得られた美深町のスポーツ振興には、大きく分けて 2 つの特出した特徴が見受けられた。

1 つは「人材の好循環」である。全国に先駆けて、引退後のトップアスリートを生体指導員として雇用、配置、相互協力協定を締結している大学からの専門的人材の長期派遣受入に取り組む。一方では、各組織での指導者不足解消、人材育成に向けた地域間連携を推進している。学校と地域の連携を強固にし、互いの課題を解決するに留まらず地域スポーツにおける人材の拡充に取り組んでいる。

もう 1 つは「生涯スポーツ(地域)と競技スポーツ(トップ)の好循環」である。決して相反するものではなく、融合することでプログラム、人材、地域での環流が起き、よりスポーツへの関心をもち、参加意欲の向上へとつながることが示唆される。また、この取組みにより、地域発信として“grass roots から Top of top”へと向かう機運が高まり、より競技力の向上に資するようになる。と考える。

これら 2 つは、今後の我が国におけるスポーツを考える上では、極めて重要な戦略であり、今日我が国、各地域が抱える多くの課題に対する解決への糸口となることが示唆される。

**提言 2. 連携によるスポーツ振興**

本研究によって得られた知見からは、組織間連携や人材の横断的取組みにより、よりニーズに即したスポーツ振興が行わ

れていることが示された。しかし、特定の人材への過度な業務負担が課題として浮かび上がり、継続的な施策という観点から今後のスポーツ振興方策を検討する場合は、先述した好循環を目指した“新たな連携”の構築が望まれる。

- ・組織間、個人間でのメリット・デメリットの理解・把握
- ・連携による既存の方策の再展開
- ・組織を横断した連携・協力型による人材(指導者等)養成

**提言 3. 地理的環境下にあるスポーツへの理解及び実態把握**

本研究における調査は、個人を特定する調査ではない為、推察となるが、居住環境の都合により、高頻度(週に数回)の定期的なスポーツ活動に参加することが難しかった子どもにとっては、頻度を考慮した機会(月に 1,2 回程度)を新たに作ることで参加可能となり、該当者のスポーツ活動の促進につながる。と示唆される。

- ・気候、立地等の潜在的に固定化されている実情を包括した方策の検討が望まれる
- ・頻度、事業内容の充実化≠スポーツ活動の促進

**付則**

本研究によって開示された公文書、資料の内容や研究成果の公表については、びふかスポーツクラブや本研究関係機関、関係者への了承を得ていることを付言する。

**参考文献等一覧**

1. 浅見俊雄、江橋慎四郎、岡野俊一郎(2002)戦後六十年を期して-スポーツ過去、現在、そして未来、スポーツ白書-スポーツの新たな価値の発見-、小野清子発行、pp12-24、SSF 笹川スポーツ財団
2. 阿部智(2008) Bullschiule プログラムが児童の運動能力に与える影響、奈良教育大学紀要第 57 巻、pp169-179
3. 株式会社ベネッセコーポレーション Benesse 教育研究開発センター(2010)第2回子ども生活実態基本調査 速報版
4. 川西正志、野川春夫(2006)生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-改訂 2 版、市村出版
5. 黒須亮、水上博司(2003)ジグソーパズルで考える 総合型地域スポーツクラブ、大修館書店
6. 小林寛道(2005)子どもの体力の現状と今後、小児科臨床 vol.58、pp487-494
7. スポーツ振興基本計画
8. 第 4 次美深町総合計画
9. 第 6 次美深町社会教育推進中期計画
10. 中央教育審議会答申(2002)子どもの体力向上のための総合的な方策について
11. 独立行政法人統計センター 政府統計の総合窓口(e-Stat) <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>
12. 西嶋尚彦(2003)子どもの生活習慣と体力との関係、日本体育学会大会号(54)、pp476
13. びふかスポーツクラブ 運動能力向上プログラム概要
14. びふかスポーツクラブ 平成 22 年度役員総会議案
15. 美深町遠距離通学児童生徒の通学補助条例
16. 美深町生活リズム向上委員会 平成 19 年度子どもの生活リズム向上のための調査研究報告書
17. 福林徹(2010)平成 21 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 IV 子どもの発達段階に応じた体力向上プログラムの開発事業-文部科学省委託事業-、財団法人日本体育協会
18. 本間孝太郎、勝田隆(2010)市町村のスポーツ振興の充実にはスポーツ専門職員の果たす役割と課題-北海道美深町を中心とした 2009 年度スポーツ振興の取組み事例から-、仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集第 11 巻
19. 文部科学省(2004)「子どもの体力向上のための総合的な方策について」

20. 文部科学省(2010)スポーツ立国戦略-スポーツコミュニティ・ニッポン-
21. 文部科学省(2009)平成21年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書
22. 文部科学省「へき地児童生徒援助費等補助金交付要綱」の一部改正について
23. 八代勉、中村平(2002)体育・スポーツ経営学講義、大修館書店
24. 山口泰雄、岡達生、小倉乙春、永松昌樹(2002)スポーツクラブ、スポーツ白書-スポーツの新たな価値の発見-、pp58-77
25. 山口泰雄、工藤康宏、高峰修、野川春夫(2002)スポーツイベントと振興プログラム、スポーツ白書-スポーツの新たな価値の発見-、pp160
26. 脇田裕久(2004)いま、どうなっている子どもの体力、体育科教育 vol.52(12)、pp.10-13、大修館書店
27. Australian Sports Commission 公式ホームページ  
<http://www.ausport.gov.au/index.asp>
28. SSF 笹川スポーツ財団(2005)平成16年度文部科学省委嘱事業 諸外国におけるスポーツ振興政策についての調査研究